

令和7年子供に関する定点調査「とうきょう こども アンケート」 検討会議（第4回）次第

日 時 令和7年9月10日（水）午前10時から12時まで
開催場所 東京都庁第一本庁舎 33階特別会議室 S2

1 開会

2 議題

- （1）会議スケジュールについて
- （2）最終報告書（案）について
- （3）子供向け報告書（案）について
- （4）次年度に向けた改善点について
- （5）その他

3 閉会

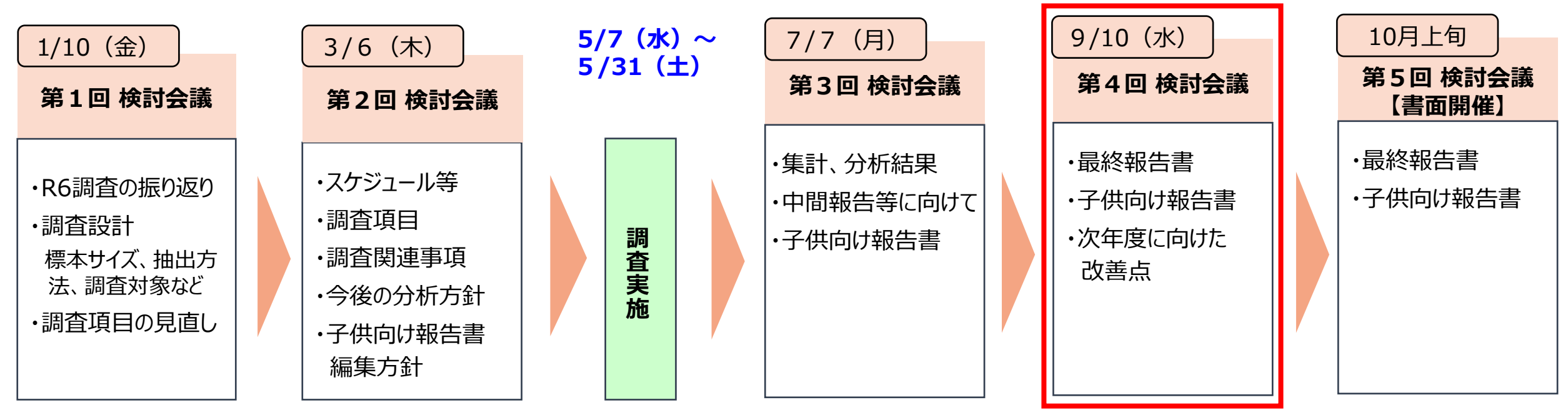
【配布資料】

資料1 令和7年子供に関する定点調査「とうきょう こども アンケート」
第4回検討会議

令和 7 年子供に関する定点調査 「とうきょう こども アンケート」 第 4 回検討会議

2025年9月10日（水）
東京都子供政策連携室

1. スケジュール等（会議スケジュール）



2. 最終報告書（案）について

■最終報告書（案）

- ・ 構成案のとおり作成（R6調査をベース）
- ・ R5調査からR7調査までの**3か年の経年データをまとめた付属資料**を作成

構成案			
調査報告書要旨		Ⅱ. 調査結果	
1. 調査結果の概要	2. 主な調査結果	1. 子供編	全設問の学年別、区部・市町村別、幸福度別クロス集計
		2. 保護者編	
Ⅰ. 調査の概要		3. その他	
1. 調査の目的		(1)ギャップ分析	
2. 調査の項目		【子供と保護者の差】	過去1年以内の嫌な経験（子36/保34）等
3. 調査の設計		【男女の差】	週に30分以上遊んだり体を動かしたりする日（子7） あなたは将来、子供を育てたいと考えていますか。（子13）等
4. 検討会議		(2)テーマ別	
5. 調査機関		【子供の意見表明】	学校等で意見が言える（子25B）×自分の考えをしっかりとる（子27B）等
6. 各調査対象の設問数		【安全安心】	過去1年以内の住む地域で経験した危険な目（子8）×WHO5（子34カテゴリ別）等
7. 回収結果		【学校生活】	学校等で意見が言える（子25B）×学校等の居心地が良い（子25A）等
標本抽出方法		【学び・成長】	学ぶことが楽しい（子16C）×自分の行動で社会を変えられる（子15F）等
標本数の配分		【居場所・遊び】	居場所-自宅以外と自宅のみ（子33）×自己肯定感（子26D）等
抽出		【地域社会】	地域の人との関係（子32D）×他人から必要とされている（子26F）等
報告書の見方		【子育て】	子育てを楽しんでいる（保23H）×子供の幸福度（子26B・高中低）等
		(3)他調査比較	日本財団「18歳意識調査『第62回-国や社会に対する意識（6カ国調査）-』」等
		(4)重回帰分析	学年別

3. 子供向け報告書（案）について

■子供の意見聴取

	5月		6月		7月		8月		9月		10月	
子供向け 報告書作成 スケジュール		★ワークショップ (小3・小5・中2・17歳) ↓				★出前授業 (小3・小5・小6) ↓		★個別インタビュー (小3・小5・中2・17歳) ↓				
		構成案作成		初稿作成				最終報告書作成				

個別インタビュー

- ・都内の小学3年生、小学5年生、中学2年生、17歳の各2名に、報告書の初版について意見聴取（8月下旬実施）
- ・内容やデザインに反映し、対象年齢に応じてわかりやすい報告書を作成

小学3年生

- ・マンガで始まるのが面白い
- ・文字量が多いところがある
- ・「コラム」という言葉の意味がわからない
- ・イラストを増やした方が良いところがある
- ・わかりにくいグラフがある

小学5年生

- ・ストーリーが面白い／幼い
- ・外国人のキャラクターには簡単な英語を話すようにしたらどうか
- ・文字量が多いところがある
- ・「コラム」という言葉の意味がわからない
- ・円グラフは100%になるようにした方がよい

中学2年生

- ・マンガで始まるのはわかりやすい
- ・グラフの色がわかりにくい
- ・円グラフがわかりにくい
- ・同じようなイラストが多くてメリハリがない

17歳

- ・登場人物は時代に合っている
- ・マンガで始まるのは良い
- ・タイトルは現状の案で良い
- ・グラフは注目すべきところに色をつけると良い
- ・最後にメッセージ（結論）を入れるとよい

4. 次年度（R8調査）に向けた改善点について

■ 調査方法

サンプルサイズを同規模で確保し、経年比較を適切に行うため、原則、**R7 調査方法を継続**する

項目	R 8 調査方法（案）	R 7 調査方法
調査時期	令和 8 年 5 月頃（ 4 週間程度）	令和7年5月7日～5月31日
調査対象・配布世帯数	・調査対象：小学 3 年生、小学 5 年生、中学 2 年生、17歳の子供及びその保護者、3 歳児の保護者 ・配布世帯数：合計10,500世帯	左記と同様
調査方法	郵送法（郵送配布・郵送回収、WEB（インターネット）回答併用）	左記と同様
抽出方法	層化二段無作為抽出法	左記と同様
同封物	・挨拶状 ・前年の調査結果の概要ペーパー(子供向け) ・東京都こども基本条例ハンドブック ・粗品（内容は今後検討）	左記と同様 （粗品はボールペン及び除菌ウェットティッシュ）
謝礼	回答した子供に対し、500円分の謝礼を送付（内容は今後検討）	左記と同様 （謝礼は、小学生は図書カード、中学生・17歳はAmazonギフトカード）
その他	・調査期間中に督促状を送付 ・都の広報媒体（Xなど）を通じて、事前に調査実施する旨を周知	左記と同様

4. 次年度（R8調査）に向けた改善点について

■設問

- ・調査の継続性を担保する観点から、R7調査と**同じ設問を原則**とするが、R8調査における検討会議の議論も踏まえて**適宜見直し**を行う

■分析

- ・R7調査と同様の分析を実施

共通クロス集計（学年別・区市町村別・幸福度別）、個別クロス集計、経年分析、ギャップ分析（男女や親子）、他調査比較、重回帰分析

■報告書

- ・中間報告書、最終報告書、子供向け報告書（小学3年生版、小学5年生版、中2・17歳版の3種類）を作成
- ・新たに**ショート動画（30秒～40秒程度）を作成**し、子供向け報告書の内容を一部紹介するとともに掲載ページへ誘導
- ・R5調査からR8調査までの4か年の経年データをまとめた付属資料を作成

5. その他

■ 子供政策強化の方針2025（2025年8月）

- ・ 子供を取り巻く様々なデータや子供の声を整理しながら、子供政策の課題と今後の政策強化の方向を示すもの
- ・ 本方針に基づき、来年度予算編成において子供政策の更なる加速と新たな展開につなげるもの



<組織横断で取り組む「リーディングプロジェクト」の新たな取り組み例>

新たなリーディングプロジェクト

<想定テーマ>

思春期の「メンタルヘルス」増進

- 思春期のメンタルヘルスが世界的に深刻な課題となる中、日本においては自殺率が高く、子供たちにとって重大な脅威
- 思春期におけるメンタルヘルスの増進は、成人期において充実した生活を送るための大切な基盤
- 未来を担う子供たちの誰もが将来に希望を抱くことのできる社会が実現できるよう、メンタルヘルス対策を強化していく

○ 思春期のメンタルヘルスは世界的にも深刻な課題

WHO（2024年10月掲載記事）

- 世界的には10歳～19歳の7人に1人が精神疾患を経験
- 自殺は、15歳～29歳の死因の第3位
- 思春期のメンタルヘルス状態に対処しないと、その影響は成人期まで及び、身体的及び精神的健康が損なわれ、成人として充実した生活を送る機会が制限される

○ 世界の中でも日本の青少年の自殺率は高い

子供の精神的幸福度

10歳～19歳の自殺による死亡率

日本の自殺率

自殺者数の推移

○ 思春期のメンタルヘルス対策の重要性が増している

子供の幸福度

自殺者数の推移

○ 思春期等のメンタルヘルスの問題は、成人期にも影響

メンタルヘルスに関する研究事例

新たなリーディングプロジェクト

<想定テーマ>

多様な「子供の居場所」創出

- 子供にとって、ほっとできる居場所、安心できる居場所は、幸福度や自己肯定感等を高める上で重要な役割を果たしていく
- 地域のつながりの希薄化、核家族化の進展等により、子供が置かれている環境は様々
- 一人ひとりの置かれている環境に寄り添い、子供の居場所を創出し、子供のウェルビーイングを高めていく

○ 自宅以外の居場所がある子供は、幸福度や自己肯定感などが高い傾向

幸福度

生活満足度

自己肯定感

自己有用感

○ これまで、都では、子供の多様なニーズを踏まえ、区市町村等と連携し、子供の居場所を様々な形で創出

地域の居場所

朝や放課後の居場所

多様な子供の居場所

○ 中高生にとっては地域の居場所が課題

あなたにとっての居場所（※）はどれですか

【様々な居場所の中高生の声】

【都内の子供の主な地域の居場所（施設数）】

○ 中高生の居場所に対するニーズは様々

○ 海外では、ユース向けの居場所づくりに取り組む都市も存在

ユースの居場所（施設数）

15歳～18歳の人口

1施設当たりの中高生世代人数（試算）※

ユースの放課後の過ごし方（ベルリン）

政策強化の方向

- 思春期における心身の健康づくりを推進
- 子供の心の不調に関する気づきと見守りを促進
- 子供の日常の過ごし方等を把握し、思春期のメンタルヘルスへの影響等进行分析

政策強化の方向

- 学齢期をはじめとした子供の多様なニーズを踏まえた居場所を創出
- 区市町村等と連携し、中高生の地域における日常的な居場所づくりを強化